

JASIS 2023 見聞録

(Japan Analytical & Scientific Instruments Show)

『測る』が支える未来の社会」のサブタイトルのもと、最先端科学・分析システム&ソリューション展「JASIS 2023」は、2023年9月6日（水）～8日（金）の3日間、幕張メッセ（千葉市美浜区）で開催されました（写真1）。

筆者は7日の午前におおよそ全体の展示を巡って営業担当者との打合せを済ませ、14時から他の編集委員2名と共にJAIMA本部のJASIS委員会 生野朗委員長、技術委員会 杉沢寿志委員長、長谷川武義事務局長とHall5の1Fにある本部会議室にて取材を致しました。

2012年にJASISの名称になってから12年目を迎えた本展示会は、日本分析機器工業会（JAIMA）と日本科学機器協会（JSIA）が主催する日本最大規模の分析機器・科学機器の展示会であり、本展示会を目安に新製品を発表する企業も多いそうです。JASISの歴史については昨年の見聞録（「ぶんせき」2022年11月号掲載）に詳細がございますのでそちらの記事を是非ご参照下さい。

本年度の出展社数は345社、小間数は1,096小間と、昨年度に比べそれぞれ7%、11%ほど増えて入るものの、コロナ禍前の478社（2019年）に比べると依然回復途上だそうです。これは出展締切時にまだコロナの扱いが5類移行前で、状況が読めなく躊躇する企業もあったためと考察しているそうです。

参加者数は2019年までは例年23,000～24,000人程度でしたが、2020年はコロナ禍の影響で7,299人となり、その後2021年は8,490人、昨年2022年は12,465人と堅調に回復し、今回は20,000人を目標としているとのこと。取材時点の初日来場者速報値が約6,600人と目標通りでありましたが、8日に接近した台風による大雨の影響もあり、最終的には合計16,115人となったそうです（会期中途中で中止が危惧されましたが、実際はほぼすべてのプログラムが予定通りに実施されました）。



写真1 JASIS 2023 展示会場の様子

コロナ対策の制限がほぼ完全に撤廃されて初となる今回の開催にあたり、前回JASIS 2022来場者のアンケートをキーワード解析した結果、JASISの魅力は「直接の会話」「実機に触れられる」という言葉が浮かび上がってきたということです。そこでJASIS 2023では『Come Touch JASIS』を合言葉とし、『見て・触って・実感・体験』ができるように、出展される企業に出来るだけ実物の展示と説明員の数を増やすようお願いしたそうです。実際、見学したほとんどのブースで実物（や模型）等立体物の展示があり、バーチャルではできないことに各社力を入れていることを実感しました。

展示会場はHall 4～Hall 6の3ホール分で、コロナ前に最大5ホール使用していた時よりは狭めですが、全部を見て回るには十分な広さでした。休憩スペースも最小限にして、びっしりと各ブースを配置し「にぎわい」感を演出したそうです。各企業ブースのレイアウトもよく考えられており、集客力がある大きな企業ブースやアンケートコーナー、JASISスクエアを一番奥に配置し、できるだけ多くの方が回遊して多くの展示に「気づく」ことができるように、また小規模の出展や初めての出展社が疎外感を味わうことが少ないように工夫されていると筆者は感じました。

本部企画としては、①トピックスセミナー、②新技術説明会、③WebExpo、④JASISスクエアの四つがあり、取材ではそれぞれについて詳細な説明を下さいました。

①のトピックスセミナーは「ライフサイエンス」「先端材料」「環境」「DX（デジタルトランスフォーメーション）」「食品」「教育」の六つのテーマに関する19の講演が開かれました。中でも最も参加者の多かった初日朝一番の「日本薬局方セミナー」（登録者数355名）と、最終日の「世界に広がる化学物質規制の最新動向（PFAS）」（登録者数321名）は、早い段階で事前予約は満席、当日はキャンセルを待つ人の列が出来ていました（写真2）。



写真2 トピックスセミナー会場前の様子

②の新技術説明会は69社261テーマの発表がありました。今年は例年会場としている隣接のホテルは使用せず、展示会場から2階の屋内連絡通路で濡れずに行ける国際会議棟の1~3階の会議室を会場としていました。これは展示会場との一体感および待機列のスペース確保を考えてのことだそうで、特に8日(金)の大雨下では威力を発揮したと思います(ただし来年は発表件数が増えそうで、再びホテル等を使用する可能性がある、とのことです)。新技術説明会では各分野の最新情報の紹介も勿論ですが、「いまさら聞けない~」シリーズなど新人やこの分野に初めて取り組む人のための講座が特に人気だそうで、会社の若手参加者も多い大規模展示会ならではの魅力だと思いました。JASIS本部としてはJASISの教育的側面を今後さらに重視していきたいようで、参加者の裾野を広げる試みとしてはとても有用に感じました。

③のWebExpoは今年も会期前から11月末まで開催され、会場に来られない方や見逃した方々のニーズを補完しています。WebExpoはコロナ禍前から行われていた試みであり、昨年よりアクセスが減っているものの今後も続けていくそうです。

④のJASISスクエアについては、事務局本部での説明後現地で見学させて頂きました。JASISスクエアは海外の関係団体が参加するInternational organization areaや国内の研究機関・学協会コーナーのほか、ラボDX展示コーナーやヒトゲノム特別企画コーナー、ステージエリアで構成されていて、その一通りを見て回りました。特にDX展示コーナーでは各メーカーからの機器の出力結果を表現する国際統一フォーマットの作成が進んでおり、これは人間に対するユーザインターフェイス(UI)の問題だけではなく、近い将来実現が見込まれるロボットによる自動実験/測定への対応を考えてとのこと(写真3)。ロボットによる実験のオートメーション化の展示は今回いくつかあってどれも非常に多くの方が見学しており、新しい時代の研究のあり方を考えられました。一般の企業ブースを見てもコロナ禍前に比べると、「前処理の自動化」の実機展示が多くなったように思います(写真4~6)。また2003年に完了し

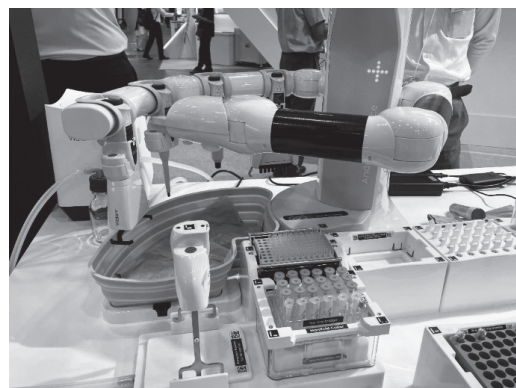


写真4(上) 前処理自動化の説明の様子
 写真5(中) 前処理自動化の展示
 写真6(下) ロボットアームによる実演

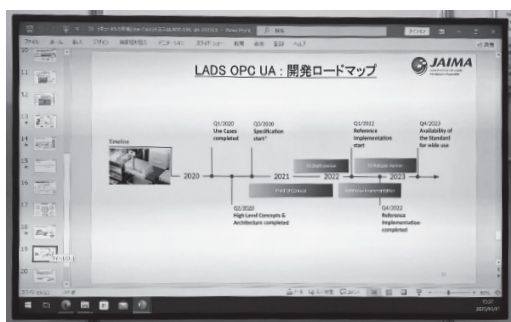


写真3 DXを見越した開発ロードマップ

たヒトゲノム解析に関する特別展では、ヒトゲノム解析の主役となったシーケンサーの実機が展示されており、詳細な説明で当時のことを学べると共に、「今世紀の出来事が歴史的に扱われている」という事実への流れを感じました。

JASISスクエアの隣には韓国研究産業協会のブースがあり、韓国企業が10社まとまって出展していました。このような形での韓国からの出展は今年が初めてだそうです。

幹事企業である日本電子のブースを訪ねました。島津製作所に次ぐ広さを誇るブースにはもちろん多数の装置が展示されていますが、その中で二つのことが印象に残りました。一つは装置の種類ごとの展示ではなく、半導体や食品など分析機器利用者の専門分野に対応したイメージの展示をしていることで、日本電子ではこれに



写真7 日本電子の展示



写真8 Rigaku 社によるコラボ展示

「YOKOGUSHI」という名称を付けてイメージを統一していました(写真7)。もう一つは Rigaku 社とのコラボレーションによる電子線回折による微結晶構造解析装置(単結晶 X 線構造解析よりはるかに小さな粉末結晶で同様の分子構造解析ができる)で、このブースと共に Rigaku 社のブースにも実物大のモックアップが展示されていました(写真8)。

また、国際会議棟では JASIS もスポンサーとなっている国際会議 RSC Tokyo International Conference 2023 (RSC-TIC2023) も開催されました。RSC-TIC の名称になってから 12 回目となる今年は、4 年ぶりに JASIS 本体との同時日程・会場に戻り、「Data Processing and the Use of Smartphones for Analytical Chemistry」というテーマのもと、9 件の国際色豊かな招待講演と 70 件近くの Poster 発表がすべて英語で行われました。今年は JASIS の登録があれば国際会議の事前登録無しに会場に入ることができ、Lunch Break も 2 時間と長めに取って

あるなど、JASIS 2023 と親和性が高いことも特徴の学会です。筆者(橋本)も参加しましたが、講演・ポスター共にレベルが高くかつ興味深い内容で、非常に刺激になりました。こちらも参加/発表共無料ですので、関連する企業の皆様・先生方には是非次回のご参加をご検討していただきたいと思います。

来年も例年どおり、2024 年 9 月 4 日(水)~6 日(金)の日程で幕張メッセにて開催予定です。会員の皆様、上記関連国際学会(RSC-JASIS-Tokyo 2024)も含め、是非ご予約をお願い致します。

最後になりましたが、ご多忙の中長時間にわたり案内を引き受けて下さいました JASIS 事務局の杉沢様・生野様、長谷川様に改めてこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

〔上智大学理工学部 橋本 剛
オルガノ株式会社 高橋 あかね〕